

## 佛光人の慈悲愛心を宮城県石巻市に届ける

【人間社記者心微宮城県石巻市から報道】



3月31日、宮城県気仙沼市「東陵高等学校避難所」の避難者の方々に愛心料理の炊き出しをした後、4月1日昼、佛光人一行17名はまた別の避難所へ向かい、被災者の方々に「味噌うどん」の炊き出しをした。

3時間余りの距離、石巻市の街道を通るバスから見たのは、泥まみれの道で破壊した自宅を片付けている住民の姿だった。全国各地から支援に来た警察官は交叉点で交通整理をし、秩序の

維持に協力していた。ガソリン不足のためガソリンスタンドに並ぶ給油待ちの車の長い列が渋滞を引き起こしていた。被災者は配給所で列になって並び、自衛隊が水と食料を配るのを待っていた。アメリカ軍兵士は被災した行方不明者の捜索及び被災地の瓦礫撤去に協力していた。石巻市は港に近いため、これ以外にも津波で押し流された漁船や、屋上の車など、至る所に津波の爪跡が見られた。

法音寺は港近くの山の中腹に位置し、被災者に暫時の安住の場を提供している。NPO EARTHの石原顕正理事長に連れられ昼頃、震災後の窃盗によって空になっていたコンビニ前の広場に佛光人は調理器具を設置し、お昼の「味噌うどん」を調理し始めた。法音寺の谷川正明住職は軽トラックを運転しながら、大声で「台湾佛光山寺の法師様と信者さん達が美味しいお昼を用意してくださったので、皆さん、麓に来て温かいうどんを頂きましょう」と人々に呼びかけてくださった。間もなく150名ぐらの被災者が鍋やポリ袋、どんぶりなどを持ってうどんを食べにやって来てくれた。久しぶりの野菜、温かい味噌汁、そして、バナナ、パンなど、大人も子供も皆さんが「美味しい」という表情だった。傍にいる佛光人も皆さんの嬉しそうな表情を見て嬉しくなるのであった。重い災難を背負った被災者に対して私達ができることは限られている。微力だがこれが私達の真心の表現である。





法音寺を離れて最後の目的地「久円寺」に向かった。少し前に石原理事長を通して10トンの物資を送っていた。今回もバナナや蜜柑などの新鮮な果物を送った。谷川海雅住職は佛光山が即時に救援物資を届けてくれ、被災地域近辺の人々が物資を受け取ることができた。今回、佛光山と力を合わせて慈善交流ができたことを非常に嬉しく思うとおっしゃっていた。



今回現地で活動に参加した精進分会の松田龍宗氏は、毎日テレビのニュースや新聞報道で、無情な大地震と津波による無残な姿を目にし、「彼らのために何かしたい」と思っていた。東京佛光山寺の法師が会員を連れて被災地へ炊き出しに行くことを知り、直ぐ妻の陳宥希师姐と共に参加したのであった。被災者の中に一人でも喜んでくれる人がいたら、それで満足だと思っていたが、大勢の人達が嬉しそうに食べていたのを見て、今回の活動は非常に意義のあることだったと語った。

また、新宿分会簡麗娟会長は、自分は運転も料理もできず介護の資格もない。しかし、食器を並べたり後片付けはできる。兎に角、被災者のために何かやりたい。今回、被災者に奉仕するチャンスを与えてくれた法師の方々に感謝したいと述べていた。

同行したNPO EARTHの石原顕正理事長及び小林康弘氏はこの二日間、佛光人の団結精神と大衆への奉仕の態度に感嘆し、今後、佛光山及び佛光会が何か協力を必要とする時、甲府に所属する彼らの八十軒の寺院が全面的に支援すると言ってくれた。

二日間の救済活動を円満に終え、覚用法師は参加した会員達に感謝すると共に、困難な場所であったが被災者のために美味しい食事を作ることができた慈悲と愛心は、必ずや被災者の皆さんの心に残るであろうと述べた。